

「トラ・寅・虎」の多様性

——『曾我物語』の虎御前に関する一考察——

新村衣里子

はじめに

源頼朝が征夷大将軍に任命された翌年の建久四（一一九三）年、曾我十郎祐成と五郎時致が富士の裾野で父親の敵である工藤祐経を討った。この事件を題材にして作られたのが『曾我物語』である。敵討成就後に非業の死を遂げた彼らは畏れられ、御霊神として崇められることになる。従来の研究では、彼らの霊を鎮めるために行われた語りから曾我兄弟の物語が生成されてきたと考えられている。

折口信夫氏は、熊野信仰の一分派に関係するとみられる、箱根や伊豆を拠点に活動した髻巫女を物語の語り手として想定する。その後、角川源義氏によって「原曾我物語」の存在が想定された。氏は「原曾我物語」の作者に木曾義仲の右筆であった箱根山の大夫坊覚明（信救）を擬し、その展開としての「中間真名本」が安居院の唱導家の影響のもと伊豆山密厳院で成長し、さらに時衆教団に管理されて「十卷真名本」が成立したと推察される。²⁾

また福田晃氏は、物語になる以前の「曾我語り」の存在を想定し、死霊の口寄せをする巫女に発した曾我御霊の語りが「箱根駒形修験

比丘尼」や箱根と密接な関係にあった大磯の「高麗比丘尼」らの関与によって成長したとする。さらに時衆、勸進聖、念仏聖、念仏比丘尼などの人々を経て展開していったことを考究された。³⁾

『曾我物語』の諸本は、その表記の上から真名本と仮名本に大別される。⁴⁾ 本稿では、古態を示すとされる真名本『曾我物語』（以下、真名本と称す）を手掛かりに、十郎の恋人である虎御前の名が喚起する多様性や境界との関わりなどについて検討する。

一 「トラ」が帯びる境界性

真名本巻五で、曾我兄弟が敵討を企てていると知った母親は、そのような心を起こさぬようと彼らに家庭を持つことを勧める。五郎は、咎が及ぶ恐れがあるから妻子は持てないが、遊女のもとに通うのであれば敵に遭遇する可能性もあり、都合がよいと十郎に説く。小田原から鎌倉までの数々の宿を巡り歩いた十郎は、最終的に大磯で虎御前と出会う。虎は、宮内判官家長が平塚宿の遊女夜叉王のもとに通って生まれた子で、寅の年の寅の日の寅の時に生まれたので三虎御前と呼ばれたという。父の死後に、容貌の美しさをかわれて

大磯宿の長者（遊女の長）の菊鶴の養女となったのだった。

大磯で十郎が虎御前と出会った理由を、角川氏は『神道集』に見えるやうな伊豆・箱根二所権現の縁起に、大磯高麗山が強く結ばれた時代の所産として、十郎の戀人大磯の虎を登場させてみたかも知れない⁽⁵⁾とする。

虎御前の名に関しては、柳田國男氏による指摘がある。氏は「越中立山の結界に石を止めた止字呂の尼、加賀の白山に石を遣した融の婆は、あるいは諸国に行脚をして石の話を分布した虎御前と関係があるのではあるまいか。すなわち今日となつては意味も不明なトラまたはトウロという語は、この種の石の傍で修法をする巫女の称呼ではなかつたらうか⁽⁶⁾」として、「トラ・トラン・トウロ」が固有名詞ではなく各地を遊行する巫女の一般名称ではなかつたかと推察される。

虎御前の名の由来である「寅」に関する出生の根拠について、角川氏は、寅年の女性が宗教的な呪力を持つと信じられていたことを挙げる⁽⁷⁾。會田実氏は、信貴山での毘沙門天の出現や中国の詩人屈原の出生が「三寅」に関わる事例などを通して、三寅が「禳災」の意を表すことを指摘される。氏はまた、呪的意味合いを有する三寅出生の「トラ」から「トラン・トウロ」へと逆訛伝したという可能性もあると考察された⁽⁸⁾。

小松和彦氏は、牛若丸（義経）による「虎の巻」入手と毘沙門天信仰による「寅」の重視を関連づけ、「毘沙門天は丑寅の方角つまり鬼門の方角に居る神、時刻でいえば丑寅の刻つまり夜と朝の境界

に立つ神であり、一年の最初の月つまり正月は寅月から始まり、鞍馬ではこま犬に代わつて虎が門前を守っているのもこれと関係があるのだらう」と指摘する⁽⁹⁾。

『教訓抄』巻一「乱声の事」に「寅一点者、為当日時剋之始。凡神明神道御遊行并奏・祝祓・必可レ用寅時云々」とあるように、寅の時は重視される時間帯であった。また謡曲でも「風も嘯く寅の時。神の告げをも待ちて見んく」（『老松』）や「残りの神々は。十月一日の寅の時に悉く影向なり。様々いろくくの神遊」（『大社』）のように、神が存在感を示す頃合いとされた。

霊山における女人結界や女人禁制の地に遺物を伝えた「トラ・トラン・トウロ」という女性や、方角や時刻を示す「寅」とも関わる「トラ」の名は空間的にも時間的にも境界性を表出するものであったと考えられる。

虎が出家した箱根は、富士の裾野へ向かう五郎が「死出・大山」と表現したように此岸と彼岸との境界であると認識されていた。落合義明氏によると、箱根は軍事的にも重視された境界であったという。氏は、大夫坊覚明が箱根山にいたのは、箱根が「罪人や避難してきた人を受け入れる場であった」からであり、境界は「観念的に生死、現世・他界を隔てる空間、または穢れの浄化、再生の場となりうる」ため、箱根山も「罪人や匿われる人々を再生させる場（山）」として広く知られていた⁽¹⁰⁾と指摘される。

虎御前は、駿河国小林郷で御霊神として祀られた十郎のものと思しき声を大木の梢から聞いたり、晩年に曾我の地で桜の木に十郎の

姿を見たりしたという。このように死者と交感し得る者であるとの印象を受けるのは、虎が境界に在る女性としての性格を有していたからであると考えられよう。

二 中世大磯の特性と三浦氏の存在

真名本に描かれた和田義盛による酒宴の場面は、中世の大磯宿の繁栄ぶりと遊女としての虎御前の様子を伝えるものである。遅参した亀若が、その理由として工藤祐経の酒宴に出ていることを虎に話したのを聞き、十郎と五郎は早速祐経を追う。大磯という地は、人々にとつての休息地であると同時に情報の行き交う場でもあった。虎御前が大磯宿の長者に貰われて平塚から移ったことは先述したが、この移動の背景には相模国府が大磯方面へと移転したという事情も反映されているのではないだろうか。『倭名類聚抄』に大住郡（平塚市）にあると記された国府が、『伊呂波字類抄』では余綾郡（大磯町国府本郷付近）にあるとされていることから、その移転時期は十二世紀中ごろ以前ではないかと従来考えられている⁽¹⁾。頼朝が旗揚げ後、最初に論功行賞を行ったのは移転後の相模国府であり、政治的に利用価値があるとの認識を持っていたと推察できる⁽²⁾。国府の移転によって人々の往来も増え、大磯周辺は活気づいて賑わっていたことであろう。

さて中世の大磯は、通過点や中継点としてその存在感を示す。その名に「いそ（ぐ）」が含まれることから、ここでの滞在は一時的なものとして描かれることも特徴として挙げられる。

『東関紀行』には「急ぐ心へのみさそはれて、大磯、絵嶋、もろこしが原など、聞ゆる所（を）を、見とゞむるひまもなく打過ぬるこそ、心ならずおほゆれ」とあり、『宴曲集』「海道下」にも、「早むる駒は大磯の 急ぎて過ぐる磯伝ひ」とみえる。このように、「磯」は「急ぐ」を連想させる地であった。

急いで通過する所であるとの大磯のイメージは、十郎と虎御前が共に過ごした年月の浅さを強調する効果もあつたであろう。陸や海の交通路として人や物が行き交う大磯の流動性は、出家後に各地を巡って移動する虎の形象に影響を与えているとも考えられよう⁽³⁾。

ここで大磯において影響力を持っていた三浦氏の存在に注目したい。海上交通を得意とした三浦氏は相模国の行政に携わっていた在庁官人である。義経の奥州潜伏が問題視されていた折、藤原泰衡による朝廷への献上品（馬や金など）が大磯に到着したことを受けて、これを差し押さえるべきか、三浦義澄が頼朝に伺いをたてている⁽⁴⁾。このように大磯で生じた問題については、三浦氏が介入して処理していた。伊東祐親の婿である三浦義澄は、捕らえられた祐親の助命を求めて尽力した人物である⁽⁵⁾。曾我兄弟が慕う三浦の伯母というのはこの義澄の妻であった。

さらに義澄の子に、曾我兄弟のいとこにあたる義村がいる。義村は四代將軍である藤原頼経と親交が深く、頼経は義村の田村の館（平塚市田村）をしばしば訪れてもいる。既に知られているように、頼経の幼名は「三寅」であった。

彼について、『愚管抄』は「二歳ナル若公、祖父公経ノ大納言ガ

モトニヤシナヒケルハ、正月寅月ノ寅ノ歳寅時ムマレテ、誠ニモツネノヲサナキ人ニモ似ヌ子ノ、占ニモ宿曜ニモメデタク叶ヒタリ」と記す。慈光寺本『承久記』にも、「当時ノ世中ヲ鎮メントテ、右大将公経卿外孫、摂政殿下ノ三男、寅年寅日寅時ニ生レ給ヘレバ、童名ヲ三寅ト申若君」を鎌倉へ連れてきたとの記述がある。この頼經の將軍在任時に、虎御前が往生を遂げているというように、「三寅」と「三虎」の生きた時代には重なる部分があった。

さて、そもそも摂家將軍となる三寅の東下は西園寺公経が中心となつて実現したとされるが、三浦義村もまた関与したのであることが野口実氏によつて指摘されている。⁽¹⁶⁾ ちなみに義村と真名本成立圏でもある走湯山とは、義村が淨蓮房源延を招いて三崎の海上にて迎講を営むなどの接点があったことが指摘できる。⁽¹⁷⁾

大磯に三浦氏が関わり続けたことは、六代將軍となる宗尊親王の鎌倉下向の途次である大磯で、三浦介が宿泊や食事などの世話役を務めたことから確認できる。さらに「足利尊氏袖判下文」によつて、三浦高繼に「大磯郷」「高麗寺俗別当職」が安堵されたことが知られる。大磯郷とそれに付随するとみられる高麗寺の俗別当職は代々三浦氏が相伝してきたと考えられている。⁽¹⁹⁾

中世において三浦氏が大磯と高麗寺に関係していたことが、三寅の伝承や三浦一族である和田義盛の酒宴話の成立に影響を与えたと想定できよう。

三 意識される境界——頼朝の支配領域

頼朝が支配する領域の境界は、夢合わせ譚によつて説明される。⁽²⁰⁾

この話は、頼朝と政子に従つて伊豆山に参籠していた安達盛長の夢を、大庭景義が解釈するというものである。盛長が見た夢の中で今回着目したいのは、箱根に参詣した頼朝が、左足で東の果てである奥州「外の濱」を、右足で西の果ての「鬼界嶋」を踏んでいったという部分である。これを景義は、東は平泉の秀衡の館まで、西は平家を滅ぼして意のままに知行するという示現であると解いた。

大石直正氏は「真名本『曾我物語』が筆録された鎌倉末の時点では、幕府の支配の及ぶ範囲はそのまま中世國家の統治権の及ぶ範囲であったといふ」とし、奥州藤原氏と平家を滅亡させることによつて成立した鎌倉幕府が外が浜から鬼界嶋までを支配領域とすることを、この夢合わせ譚は象徴的に述べているとす。⁽²²⁾ 人間田宣夫氏も、「東西の境」を鬼界嶋平定と奥州合戦によつてきわめたことが、「全国政権としての鎌倉幕府の最終的確立をもたらし」と指摘する。東西の境界設定が頼朝にとつて幕府の確立に関わる重要な政策であったことが知られる。

真名本巻五では、敵討の志を持つ曾我兄弟を諫めるために、母親が頼朝による支配領域とその領域内での監視の厳しさを引き合ひに出している。頼朝が天下を掌握した今、「東」安久留・津輕・外濱、西は壹岐・對馬、南は土佐の波込、北は佐渡の北山の内は国々に守護を置いて追捕の目を光らせているので、尋ね出されて咎められ

ることは必定だと誠めるのであった。村井章介氏によって、中世では東西南北における内部空間の限界点を「東ハ限ル〇〇」「北は××ニ至ル」のような形式で表現して四至と称し、それが「日本国」という広がりにも適用されたことが指摘される。

そうした四至が、巻九では少し変容している。敵討後に名のりを上げたが誰も攻め寄せてこない状況で、十郎が「ひとまず逃れて山野の奥で静かに自害しよう」という主旨の発言をする。それを受けて五郎は、頼朝の支配領域の広がりを根拠に、逃れることなど不可能だと窘める。その際に言及されたのが、「南は限ル熊野の御山⁽²¹⁾、北は限ル佐渡の嶋⁽²²⁾、東は限ル穴⁽²³⁾・津⁽²⁴⁾・津⁽²⁵⁾・津⁽²⁶⁾・嶋⁽²⁷⁾、西は限ル鬼界・高麗・硫黄⁽²⁸⁾嶋⁽²⁹⁾」であり、巻五の記述よりさらに変化に富んだ境界となっている。こうした叙述は阿部泰郎氏によって「鎌倉殿」の支配する日本国の領域をとりどりに示すことによつて、兄弟が立ち向かう巨大な権力が描き出される仕掛けである⁽³⁰⁾と考察される。

頼朝が曾我兄弟に対して強大な影響力を持つ存在として描かれるのは夙に指摘されるところである⁽³¹⁾。曾我兄弟は、頼朝に叛逆した伊東祐親の孫であり、頼朝の側近である工藤祐経を敵として追い続ける存在である。頼朝が勢力を伸張すればするほど、彼らの生きる世界は窮屈で困難なものへと変容し続ける。そうした彼らの息苦しさ⁽³²⁾が、頼朝の領域拡張の語りの背後にはある。

しかしまた、この東西の境界性から浮上する「トラ」の存在が、曾我兄弟を支援するものとして描かれることもまた指摘できるのである。頼朝の支配領域に関する語りは、東西から強力な「トラ」を

呼び起こす動機ともなったであろうことを次章以降で推察していきたい。

四 「東北（良）」への視線——寅と毘沙門

真名本に記される虎御前の父は、平治の乱によつて都から東国へと落ちてきた宮内判官家長という者で、彼は奥州平泉へ流された藤原基成に閥する人間だとして語られることは、虎と東北（良・丑寅）を間接的に結びつける。頼朝が東北を攻める契機となったのは義経の奥州潜伏であり、角田文衛氏によると義経は基成を頼つて奥州平泉を目指した可能性もあるとする⁽³³⁾。

基成の娘が藤原秀衡の正妻となつて生んだ泰衡は、最終的に義経を襲撃する。この時に義経が自害した衣川館は、基成の館であった。義経の死後に奥州攻めは決行され、合戦を終えて鎌倉へと戻つた頼朝は、平泉中尊寺の二階大堂という大長寿院を模した永福寺を造営する。義経や泰衡をはじめとした死者の霊を鎮めるために、大倉御所の鬼門に当たる良の方向にこの寺を建立したのである。この永福寺の造営に深く関わつた二階堂行政が別名を「生毘沙門」と号したという保立道久氏による指摘は、良と毘沙門の関係を示すものとして興味深い⁽³⁴⁾。

毘沙門と義経とが密接に関わり合うことについては既に知られるが、五郎もまたその影響を受けているといえる。五郎が箱根別当行実から授かつたのは義経が権現に寄進した兵庫鎖の太刀であり、屋

代本『平家物語』劍卷などにも、この太刀ゆえに敵討を遂げることができたとの認識があったことが知られる。⁽²⁹⁾ 靈威ある劍を義経から継承する者としての資格が、一時的にせよ五郎に与えられたと受けとめられたことだろう。さらに、斬られた十郎のもとへ駆けつけようと、太刀を額に当てて怒りの形相で敵勢を見まわす五郎の様相は「刀鉞毘沙門」(『真名本曾我物語』(東洋文庫)では「刀鉞(まはち)毘沙門」とルビを振る)に喩えられている。

義経と同様に東北や毘沙門と関連づけられる坂上田村麻呂もまた、曾我兄弟に影響を与えている。曾我兄弟が箱根路へ向かうときに通る「田村大道」は「鎌倉から藤沢・一の宮(茅ヶ崎市)・田村(平塚市)・伊勢原・秦野・大井町を経て、桑の原の辺りを南北に通って小田原に至る。(略)足柄に向かうとすれば北西へ、箱根に向かうとすれば南へと別れることになる」⁽³⁰⁾道である。ちなみにこの田村という地名は坂上田村麻呂に由来するとの伝説がある。⁽³¹⁾この地にある三浦義村の館を三寅(頼経)が訪れたことは既に述べた。

田村大道を通り抜けて辿り着いた箱根で、五郎は矢立の杉にについて説明する。「柏原宮」という太子が東夷を鎮めるために奥州へ向かう途中に、権現への手向けとして上差しの鎗矢を杉に射立てて以降、それに倣って矢を射て献じるようになったという。「筥根山縁起」では坂上田村麻呂に始まるとすることから、彼を征夷大將軍に任じた桓武天皇を「柏原帝」ともいうことが影響して「柏原宮」となったものかと考えられている。⁽³²⁾そうした由来の杉に矢を捧げる曾我兄弟の行為は、奥州に向かった田村麻呂による先例を踏襲する。

さて『神道集』の「諏訪大明神の秋山祭の事」には、田村麻呂が鞍馬の毘沙門天から授かった劍で奥州の悪事高丸を倒したとあり、その勝利に毘沙門の力添えがあったことを伝えている。

また「吾妻鏡」には、頼朝が奥州合戦の帰途に立ち寄った達谷窟についての記事が載る。それによると、朝廷の命を受けて田村麻呂や藤原利仁などの將軍が蝦夷を征服しようとした時に、賊主悪路王と赤頭が塞を構えたのがこの窟であるという。田村麻呂が、この窟の前に鞍馬寺を模した西光寺を建立し、多聞天(毘沙門天)の像を安置したことや、この達谷窟から北に十日余り行くと「外濱」に至ることも記される。「外濱」が真名本でも言及される地であることは先述したが、冒頭部分にも安日と天下を争った神武天皇が安日の同類を「外濱」へと追放したのが蝦夷の祖であると語られるように、強調された東の境界であった。

このように田村麻呂や義経を介して想起される毘沙門の存在は、曾我兄弟の敵討を成功へと導くものとして捉えられたことであろう。義経経由の太刀を得た五郎が「刀鉞毘沙門」と見做される一方で、涙もろく心弱き者として描かれる十郎の傍らに「虎」御前の存在があることされたのはそれなりの意味があったと想定できる。鞍馬毘沙門の申し子とされる小栗判官も「智恵の賢さ」が強調されるように、「寅」にまつわる虎御前もまた優れた素質を持っていると考えられたことであろう。「トラ」は、毘沙門の加護を受けて敵に勝つ話型を想起させるような、心強き名としても受けとめられたと推察される。

五 「西」の影響力——虎退治譚と敵討

十郎が虎御前を思いながら眺めやる大磯の高麗山が、箱根・伊豆の二所権現と強く結びついていたとされることは既述したが、ここはまた、「高麗国」とも関わる地であった。

大磯と高麗との関係は、中世の縁起類に示されている。政子が伊豆山で夢に見た唐の鏡は、『走湯山縁起』³⁴に「相模國唐濱」の磯（大磯）に現れたと記されるもので、三韓征討の際に神功皇后と契約して高麗国（高句麗）から日本に渡来したものだと言明される。

『箱根山縁起并序』にも、高麗寺の名は、神功皇后の三韓征討後に「高麗大神和光」を「當州大磯聳峯」に移し奉ったことに由来するとある。

以前に拙稿で考察したように「高麗」や「もろこしが原」を内包していた中世の大磯は、渡来する人々や神々と関連づけられて語られる異国性豊かな地であった。『更級日記』³⁵には、もろこしが原に大和撫子が咲いていたのを人々が面白がったとあり、『宴曲集』「海道下」にも「大和にはあらぬ唐が原をば遠く隔て来て」とあるように、大和と比較されることでその異国性が強く浮き彫りにされる場であった。異国との境界を強く意識する真名本が、「もろこしが原」や「高麗」から発せられる大磯の異国性を無視して虎を登場させたとは考えられない。

『古今著聞集』巻第九「渡辺番、所縁による赦免を拒み、奥州攻めの勲功に依りて許さるる事」には、「右大将、高麗国を責めし時

の追討使に、「高麗国うちしなへて上洛の時」などの表現がみられる。これは、征討した対象が「鬼界嶋」ではなく「高麗」であるという認識もあったことを示している。中世では日本の西の境界を指す言葉として「鬼界・高麗」という「熟したフレーズ」があらわれ³⁶とされるため、混同されることもあったかと想像されるが、征討したのが高麗であるとする観念が存在したことに注意したい。

高麗と虎との関連については、平家による難を逃れて高麗国に渡っていた対馬守藤原親光が頼朝の使者の迎えによって対馬に帰朝したという、『吾妻鏡』³⁷に載る記事が注目される。高麗にいた時に親光の郎従が猛虎を見事に射とめ、その勇猛さを感じ入った高麗国王が親光に褒美を与えたというのである。このように高麗に渡った者が実際に虎を倒したという逸話は、この時代において虎退治譚がさほど現実離れた話ではなかったことを示唆する。

中世において虎退治譚が武勇の象徴とされたことなどについては、保立道久氏による研究があり、その中で虎および虎皮は「中国文化伝来のエキゾチックできわめて強力な呪物性を有する財物」であったと説明される。また、武器の材料としても使われる虎皮は、武士にとつて剛勇と不敗を表現する護身の呪具であるとも考えられたということを指摘される³⁸。

虎退治の話は、このように一般的には武勇の称揚であると受けとめられるが、それと同時に敵討の事情を色濃く反映するものでもあったことを以下に示していきたい。「日本書紀」（欽明天皇六年十一月）には、百済に遣わされていた膳臣巴提便が、愛する子を食べ

れた報復として虎を殺して、その皮を剥ぎ取ったとある。『宇治拾遺物語』には、壹岐守宗行の家来が人食い虎を見事に射倒したという、優れた武勇を称える話（一五五話（巻第十二―十九））に続いて、子を虎に食われた遣唐使が虎を退治して子の亡骸を取り返してきたとの話も載る。虎退治は、勇猛さを示すためだけのものではなく、人を食う虎に対する報復という点で、敵討の要素を含むものであったと考えられる。

こうした敵討と関連する「虎」はまた、「虎が石」の伝承を生み出したとも推定できる。

真名本巻四には、十郎と五郎が母親に制止されても密かに敵討の志を持ち続けたという記述の後に、敵討を遂げた人物が列挙される。その中に、母を虎に食われた胡の深王の話が載る。母親の敵の虎だと思つて射通したのは「似たる虎」石であり、やつとのことて矢を抜いて再びその石を射た時には射通せなかった。その後ついに敵の虎を狩ることになるが、親の敵だと思つた時には射通せた石も、石だと思つた時には射通せなかった、というように思いの強さに焦点が当てられた挿話である。³⁹⁾

『今昔物語集』にも母親を殺した虎を討つ李廣の話（巻十ノ十七）が載るが、これもやはり虎に矢を射立てたと思つたら「虎ニ似タル岩」であったとのエピソードを含む。また少々使用意図が異なる例ではあるが、『松浦宮物語』にも「かの大將軍宇文会、人のかたちにして、虎の心あり。（略）射つる矢、石を通す」との表現がみえる。「虎」を介して「矢が石を射通す」といった連想がなされ

たものと思われる。

謡曲「放下僧」でも、唐土で母の敵の虎だと思つて射たら「虎に似たる大石」だったという話から、「これも孝の心深きにより。堅き石にも矢の立つと申し候へば」と、孝心の深さについて言及する。また謡曲「戀重荷」にも「おもくとも。思は捨てじ。唐国。虎と思へば石にだに。立つ矢の有るぞかし」とあり、思いの強さは不可能だと思われることも可能にするというメッセージを含むものであったことが分かる。

歌舞伎「矢の根」にも「虎と見て、石に田作蠣鱈、矢立の酔牛蒡煮こゝり大根」とあり、「虎」と「石」と「矢」の関連性がうかがえる。また「幼稚子敵討」に載る「虎と見て石に立つ矢も有ものを」との言い回しは、「などか思ひの通らざるべき」という下の句がついて「一念こめて行えば、どんな事でもできる」の喩えとして用いられたという。⁴⁰⁾「虎だと思つたところ石に矢が立った」との話には、敵討への一途な思いと孝心もさることながら、「成就」という主題も内包されていたといえる。

ちなみにここでは深く立ち入らないが、思いの強い女性が石になるという望夫石や松浦佐用姫の伝承事例も、その貞女という性格から「虎が石」に影響を与えたと考えられるが、これもまた異国や境界との関連性が推察できる。⁴¹⁾

大磯延台寺に今なお伝えられる「虎御石」には、矢や太刀による傷跡のようなものがついている。ある時虎御前のもとにいた十郎を狙つて矢が放たれたところ、この石が飛んできて十郎を守り、斬り

かかれた時にも身代わりとなって太刀を受けたからだという。矢の痕跡が残るといふのは虎退治譚の派生した伝承と考えられはしまいか。

このように「虎が石」誕生の背景には、虎退治譚が持ち伝えてきた、敵討を介した虎と石との結びつきがあると指摘できよう。虎御前の名が、虎退治譚に伴う「虎」を想起させて、「虎退治（敵討）↓虎と石↓虎御前と石」という連想の道筋を辿つたと考えられる。周囲による数々の説得をも聞き入れずに敵討決行へと邁進した、曾我兄弟の孝心と思ひの強さがそれを補強する。そして彼らの敵討は、不可能だと思われたが成就した。

結びに

「虎」という語は、権力や影響力などといった「力」を示すものとしても使用されてきた言葉である。『吾妻鏡』では、北条義時と和田義盛の力関係を虎と鼠のようだと喩える。將軍を廃されて京都に送還された宗尊親王も、「とらとのみもちゐられしは昔にて今はねずみのあなうよの中」（『竹風和歌抄』二四六）と、虎と鼠を引き合いにしてその落差を嘆いている。

大磯で毎年五月五日に行われる国府祭（このま）における「座問答」では、虎の皮が重要な役割を担う。一宮（寒川神社）と二宮（川勾神社）が虎の皮を用いて、どちらが上位であるかを無言で問答して競い、最終的に三宮（比々多神社）の神主による「いずれ明年まで」という仲裁で締めくくられる神事である。ここでも虎の皮が、神性を表

すと同時に「力」を象徴するものとして使われる。

角田文衛氏が調査された鎌倉時代の女性名には、「虎女」や「寅女」以外にも「虎石」や「トライシ女」、「虎毗沙女」などという名前がみえ、「トラ」が「石」や「毘沙門」とも容易に結びつく語であったことが知られる。

以上のように虎御前の名は、多様な意味を喚起するものであったと理解できる。特に東西の境界から想起された毘沙門や敵討譚と関わる「トラ（寅・虎）」の名の威力は、曾我兄弟の敵討成就を約するものとしてもその効果を拔群に發揮したと考えられよう。

注1 「國文学の發生（第四稿）」『折口信夫全集』第一卷中公文庫所収（初出

『日本文学講座』一九二七年）

2 「妙本寺本曾我物語放」『妙本寺本曾我物語』貴重古典叢刊 角川書店（一九六九年三月）。以下、真名本の引用はこの文献に拠る。

3 「曾我語りの発生」（上・中・下）『立命館文学』（一九七二年、一九七三年、一九七六年）、「曾我語りの世界——真名本曾我物語の原風景——」（上・下）『文学』岩波書店（一九八九年五月、六月）

4 漢字表記の真名本を訓読して読みやすい形にした訓読本（大石寺本）の系統に関しては、新編日本古典文学全集（小学館）『曾我物語』の解説に詳しい。

5 角川氏前掲書。『神道集』の「二所権現事」には、天竺から相模国大磯に渡来した人々が高麗寺に一夜留まって後に箱根権現と伊豆権現として顕れたとある。この話に関しては、真名本にも簡略化された形で載る。

6 「老女化石譚」『柳田國男全集』第十一卷（ちくま文庫一九九〇年）所収（初出一九一六年八月）。またトラン尼伝承については阿部泰郎氏による考察がある。「聖なるもの」と女性——トラン尼伝承の深層』『女と男の時空』『日本女性史再考』③『伊東聖子・河野信子編 藤原書店（二〇

- 〇〇年九月)
- 7 角川氏前掲書
- 8 『曾我物語』大磯の「虎」命名についての覚書『中世文学研究』第二十二号(一九九六年八月)
- 9 『鬼の玉手箱 民俗社会との交感』青玄社(一九八六年十月)(初出「ヘルメス」創刊号一九八四年十二月)
- 10 「中世東国の「都市的な場」と武士」山川出版社(二〇〇五年)
- 11 石井進「鎌倉武士の実像 合戦と暮らしのおきて」平凡社(二〇〇二年十一月)参照
- 12 『吾妻鏡』治承四(一一八〇)年十月二十三日条
- 13 巡礼する虎については、高木信氏の「虎」という女——真名本『曾我物語』における巡礼する女性たち、あるいは象徴秩序からの逃走——『相模国文』第三十八号(二〇一一年三月)など参照
- 14 『吾妻鏡』文治四(一一八八)年六月十一日条
- 15 『吾妻鏡』寿永元(一一八二)年三月十四日条
- 16 「執権体制下の三浦氏」『三浦氏の研究』第二期 関東武士研究叢書』6 峰岸純夫編(二〇〇八年二月)
- 17 義村が催した迎講については、納富常夫「三浦義村の迎講——鎌倉における弥陀信仰を通して——」前掲書(16)所収、阿部美香「走湯山をめぐる神話世界とその生成」『中世神話と神祇・神道世界』中世文学と隣接語学3 伊藤聡編 竹林舎(二〇一一年)を参照。なお、この法会に頼経の御台所(竹御所)も出席していることは注目される。
- 18 『宗尊親王鎌倉御下向記』續國史大系第五卷(一九〇三年九月)
- 19 『宇都宮文書』所収「足利尊氏下文」(一三三五年)「早稲田大学図書館所蔵『諸家文書写』の紹介」古典籍の会(代表宮崎肇)早稲田大学図書館紀要第六十号(二〇一三年三月)、『大磯町史』資料編 古代・中世・近世(1)、石井氏前掲書など
- 20 真名本の夢合せ譚については稲葉二柄氏による考察がある。「曾我物語」の夢合せ譚『大妻国文』第十九号(一九八八年三月)
- 21 喜界嶋・貴海島なども表記されるが、ここでは深入りしない。キカ
- イガシマの表記などについては、杉山和也「キカイガシマとイオウガシマの認識の変遷——鳥名の語誌を手掛かりとして——」築地貴久「キカイガシマのキ音の用字をめぐる二、三の問題」『漂到流球国記』『宝物集』・『平家物語』の検討を中心に——(ともに『軍記と語り物』第四九号 二〇一三年三月)に詳しい。
- 22 大石氏は喜界嶋が幕府の支配下に入るのには平氏滅亡によるものではなく、実際は喜界嶋征討の結果であることも指摘する。「外が浜・夷島考」『展望日本歴史9 中世社会の成立』大石直正・柳原敏昭編 東京堂出版 二〇〇一年五月(初出『日本古代史研究』関見先生還暦記念会編 吉川弘文館 一九八〇年九月)
- 23 「鎌倉幕府と奥羽両国」『中世奥羽の世界』小林清治・大石直正編 財団法人東京大学出版会 一九八二年二月(初版一九七八年四月)
- 24 村井章介『日本中世境界史論』岩波書店(二〇一三年三月)
- 25 「真名本『曾我物語』の世界像」『国文学解釈と鑑賞別冊』曾我物語の作品宇宙 所収 村上美登志編 至文堂(二〇〇三年一月)
- 26 高木信「生成・変容する〈世界〉、あるいは真名本『曾我物語』——〈神〉の誕生と〈罪〉の発生」『軍記と語り物』第二十五号(一九八九年三月)ほか
- 27 「陸奥守藤原基成——源義経と平泉——」『日本古代学論集』財団法人古代学協会(一九七九年三月)
- 28 「虎・鬼ヶ島と日本海海域史」『物語の中世』講談社学術文庫二〇一三年十月(初出『中世の生活空間』戸田芳実編 有斐閣 一九九三年)
- 29 屋代本『平家物語』剣巻(佐藤謙三・春田宣編 桜楓社一九七八年三月(初版第一刷一九七三年五月))には、「五郎箱根ノ別当行実カ手ヨリ兵庫鎌ノ太刀ヲ得テケレハ思フサマニ親ノ敵討テムケリ此太刀ハ九郎判官ノ権限ニ進セテリシ薄緑ト云劍ナリ昔ノ藤丸是也目出度劍ナリ」とある。また百二十句本『平家物語』(新潮日本古典集成)にも、「建久四年五月二十八日の夜、曾我兄弟が夜討のとき、箱根の別当行実が手より兵庫鎮の太刀を五郎に得しは、この薄緑なり。されば名を後代にあげしとかや」とある。

- 30 『真名本曾我物語』（青木晃・池田敬子他編 東洋文庫 平凡社）注
- 31 『平塚市郷土誌事典』平塚市企画編集室編（一九七六年五月）
- 32 30に同じ
- 33 文治五（一一八九）年九月二十八日条。東北と毘沙門の關係については、金沢英之『義経の冒険 英雄と異界をめぐる物語の文化史』講談社選書メチエ（二〇一二年十月）参照。
- 34 走湯山と真名本の関連性については阿部美香氏による研究がある。「伊豆峯行者の系譜——走湯山の縁起と真名本『曾我物語』——」『説話文学研究』第三十七号（二〇〇二年六月）など
- 35 櫻井衣里子「真名本『曾我物語』研究——大磯の「虎」発生に関する一考察」『國文』第九十五号（二〇〇二年八月）
- 36 村井氏前掲書
- 37 文治元（一一八五）年六月十四日条
- 38 保立氏前掲書、『黄金国家 東アジアと平安日本』（シリーズ民族を問う3）青木書店（二〇〇四年一月）など
- 39 『搜神記』卷十一（千宝 竹田晃訳 東洋文庫 平凡社 一九八二年九月）（初出一九六四年一月）に「誠意は石をも貫く」として類話が載る。
- 40 日本古典文学大系『歌舞伎脚本集』の注
- 41 『十訓抄』（六ノ二十二）や『古今著聞集』所載の望夫石説話は、戦争で遠くに旅立つ夫を中国の武昌の山で見送る女性が、子を背負いながら立ったままの姿で亡くなり石と化したという話である。『唐物語』第十二にも、夫への思慕の強さから女性が石になった話が載る。松浦佐用姫が異国に出征する夫の伴狭手彦を見送って領巾を振ったのは唐土船が往來する松浦（唐津）の高い山の嶺であつた。
- 42 建保元（一一三三）年四月二日条
- 43 但し、「石」に関しては虎に限らず他の様々な語とも結びつく語のようではある。「日本の女性名（上）——歴史的展望」教育社歴史新書 一九八九年九月（初出一九八〇年九月）

引用文献

『宴曲集』（中世近世歌謡集）所収『愚管抄』『矢の根』（歌舞伎十八番集）所収は日本古典文学大系、『東関紀行』（中世日記紀行集）所収『承久記』は新日本古典文学大系、『古今著聞集』は新潮日本古典集成、『今昔物語集』『松浦宮物語』は新編日本古典文学全集、『教訓抄』（古代中世芸術論）所収は日本思想大系、『竹風和歌抄』は新編国歌大観にそれぞれ拠つた。また『小栗判官』は『説経節』（東洋文庫）、『走湯山縁起』『箱根山縁起并序』はともに『新校群書類従』巻第二十五、謡曲は『謡曲二百五十番集』に拠つた。

（しんむら・えりこ 本学非常勤講師）